

Title	書評：梅屋潔著『福音を説くウィッチ： ウガンダ・パドラにおける「災因論」の民族誌』風響社、2018年
Sub Title	
Author	橋本, 栄莉(Hashimoto, Eri)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2019
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.24 (2019. 7) ,p.145- 148
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20190706-0145

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：

梅屋潔著『福音を説くウィッチ——ウガンダ・パドラにおける「災因論」の民族誌』

風響社、2018年

橋本 栄莉

本書は、およそ 20 年間にわたる綿密な文化人類学的フィールドワークと資料収集に基づき執筆された「災因論」の民族誌である。ある事象を解釈し説明することへの欲求は、哲学や宗教、そして科学の発展にとってなくてはならないものである。なかでも人間の不幸の原因——「災因」——は、私たちの現実を脅かすものであるがゆえに、他の現象の原因に比べ、多く、そして真剣に語られ、吟味される。

本書の目的は、ウガンダ東部トロロ県に居住するアドラ (Adhola) の人々が、自身や仲間の病や死、その他の「不幸」に直面して、その出来事をいかに解釈し、対処しているのかという実態を報告することにある。

本書の冒頭で描かれるのは、アドラ出身のある政治家の死と、その死をめぐって噴出したさまざまな「災因」の噂である。彼の突然の死は、多くのウガンダ人には「大統領による抹殺」として理解された。一方アドラの人々は、彼の死を、死霊や呪詛などのアドラの「土着」の語彙や概念を用いて、ある意味で予期されたものとして彼の運命を語り出す。様々な「災因」が導かれる背景には、どのような宇宙論的合理性が存在しているのだろうか。

この問いに答えるため、筆者は出来事の解釈に複雑に絡まっている多様な要素や原因、複数のサイドストーリーをできるだけ細部も捨てず描き出すことを試みる。その結果見えてくるのは、アドラの世界観や宇宙哲学、「近代化」と表現される諸現象、キリスト教神学と実践、国家情勢、現地のミクロな人間・事物——祖先や死霊、精霊も含めた——関係の複雑な絡まり合いの中で、一つの出来事の解釈が立体的に形成されてゆく過程である。

本書は、序章と総括を除く 3 部 14 章構成となっている。以下、簡潔に紹介しよう。

第 1 部では、アドラの世界観や災因を構成するさまざまな観念が分析・提示される。第 1 章「トウォ」では、「病気」と訳すことができるトウォの種類と原因、対処法が明らかにされる。人々の日常生活において、「伝統的」病因論と近代的な医療技術は矛盾なく併存している。第 2 章「「災因論」」では、ジュウォギ (死者の霊) や「呪詛」などの観念に基づくアドラの災因論が紹介される。第 3 章「ジャジュウォキの観念」では、性格が異なる 2 つのタイプの「ジャジュウォキ」の存在が紹介される。一つは「ウィッチ」という反社会的存在となり、もう一つは「ナイト・ダンサー」という特定の「性癖」を持つ存在であり、外形上どちらかの区別はつかない。第 4 章「ジャミギンバの観念」では、降雨をもたらすとされる「ジャミギンバ」の存在についての人々の議論が検討される。第 5 章「ティポの観念」では、夢見をひきおこし、人間

橋本栄莉「書評：梅屋潔著『福音を説くウィッチ——ウガンダ・パドラにおける「災因論」の民族誌』
『三田社会学』第 24 号 (2019 年 7 月) 145-148 頁

や事物の霊的な部分とされる「ティポ」の観念が紹介される。ティポは殺人によって発生する死霊である。ティポによる攻撃対象は世代を超えて伝染・拡大する。第 6 章「「呪詛」、ラムの観念」では、キリスト教の影響をさほど受けていないとされる「呪詛」の力の根拠や特性、方法、効果とその範囲、「浄めの儀礼」の方法が紹介される。原則的に「呪詛」は血縁にのみ効果があるとされるが、実際、およそすべての不幸は「呪詛」のせいとされがちである。第 7 章「ルスワ」では、インセスト・タブーとそれによって引き起こされる災厄の両方を包含する「ルスワ」の概念が検討される。しかし日々生じる様々な災厄のうち「ルスワ」特有の症状というのではない。第 1 章から第 6 章で明らかにされたのは、それぞれの概念が広い解釈可能性を有しており、一見すると対立し矛盾するかのような概念も、相互に関わりながらその可能性の幅を担保しているという点である。

第 8 章「12 の事例の検討と分析」では、上記の概念が日常でどのように「災因」として実体化してくるのが具体的な場面と共に検討される。検討の過程では、「災因」の適用可能性に関して、相当程度の自由な解釈を行う人間像が浮かび上がってくる。第 9 章「精霊は教会の指導者たちとの対話」では、新興のキリスト教関係者がアドラの諸観念をどう考えているのかが明らかにされる。教会関係者が教会や「神の力」を語る時の論理基盤は、すべてアドラの「災因論」であった。

第 2 部では、アドラの葬送儀礼と関わる資料が考察される。第 10 章「葬儀の語られ方」では、葬送儀礼の一連の流れが描かれ、儀礼的特権者であるオケウオの地位の重要性が確認された。第 11 章「あるポスト・コロニアル・エリート之死」では、埋葬儀礼の様子から、キリスト教と伝統的な儀礼に加え、民族ユニオンという新しい発明を取り込んだ形で死者の社会関係が描かれた。第 12 章「葬儀の実際」では、近年になって発生している「問題飲酒」の実態と、「妖術」あるいは「呪詛」との関係が指摘された。

第 3 部では、アドラ出身の国務大臣アルファクサド・チャールズ・コレ・オボス＝オフンビ (Arphaxad Charles Kole Oboth-Ofumbi, 以下 ACK と略) の死をめぐる噴出したさまざまな解釈や語りを取り上げられる。第 13 章「ある遺品整理の顛末」では、ACK が生きた背景であるアドラのコロニアル、ポストコロニアル状況が描かれ、「アミンによる抹殺」だけでは説明がつかない ACK の死のありかたが指摘される。第 14 章「福音を説くウィッチ」では、ACK の死をめぐる噂が取り上げられ、「ティポ」「呪詛」などの観念が絡み合いながら、人々の解釈が形成されていく過程が記述される。ACK の近代的邸宅を囲う「有刺鉄線の外側」と「内側」には、異なる災因の「合理的論理性」が存在した。ACK 自身の言動や祖先のふるまいなどから、ACK の死についていくつもの「思い当たるふし」が人々によって検討される。ここでは複数の「物語生成装置」の存在が確認された。

20 年余りの歳月をかけて収集された史資料を 760 頁に凝縮した本書の功績は、到底本稿の中で述べきれものではない。以下では、本書の功績を三点に絞り指摘する。

一点目は、「災因論」の民族誌を達成するための、方法論についての綿密な検討である。筆者

は、あらゆる方向に伸びてゆく可能性のある出来事の解釈の筋道を「蜘蛛の糸」に例える。縦糸は、災因論の民族誌としての展開、横糸は、アフリカの宗教研究の文脈における災因論という分析枠組みの見直し、「テキスト」と筆者が呼ぶ資料論、西ナイル系諸民族間の比較民族誌的研究、と設定された。この「蜘蛛の糸」のイメージに沿いながら民族誌的記述を重ねてゆくことで、本書はアドラの宇宙世界観を描き出すのみならず、分析者側にも存在する出来事の解釈のための「蜘蛛の巣」を読者に意識させる効果を持たらした。

二点目は、人類学の方法論上重要となる概念の再生と発展である。筆者は、災因論批判にも目配せをしつつ、理論ではなく資料収集の視点としての「災因論」という考え方に注目する。これにより「ウィッチクラフト」や「邪術」といった分析者側で使い古された枠組みによる拘束から逃れようと試みる。さらに、筆者は出来事に筋をつけ経験を統合する効果を持つ「物語（論）」、複数の「因果」のうち一つが前景化されていくプロセスを追うことを可能にする「アブダクション／推論」、そして「災因論」という三種の視点を効果的につなぎ合わせ相互補完することで、ある災因が人々の生きた経験となってゆく様相を見事に描き出した。

三点目は、人々の生きた対話の丹念な記述とともに提示される現地語概念の分析である。人類学者は、「伝統」に詳しい現地の老賢人の言葉をそのまま概念の説明として提示することがあるが、その説明は、人々の生きた現実に当てはまらないことも多い。その点筆者は、概念を安易に翻訳し、説明することを徹底的に避けている。膨大な録音資料や対話から特定の概念の豊富な活用のヴァリエーションを提示することで、本書は在来概念が新しく流入した概念——近代医療技術やキリスト教的神学・実践——と不可分に結びついて人々のリアリティを形成していることを説得的に論じている。

最後に本書の課題と可能性を指摘したい。筆者も随所で触れているが、本書が有する比較民族誌研究としての可能性である。もちろん、筆者は具体的な「事実」の細部に目くばせすることで、大きな理論に現象が回収されることは避けようとしてきた。しかし、各章では、アドラにのみ特有とはいえない現象が記述されており、理論化とまではいわなくとも、読者は人類社会に普遍的な現象として事例を捉えたい欲求にかられる場面もあるだろう。

本書の一番の見せ場は、第1部・第2部で詳細に検討されてきた現地の概念を用いた語りと噂が一気に噴出する第3部であろう。ACKの一族がキリスト教への強い信仰心のもとで建設した巨大な十字架と墓、隣接するチャペル等は、死霊に対する「対抗呪術」とみなされ、かえって人々の噂を確信へと導くことになった。人口の大部分がキリスト教徒と登録されているこの地において、キリスト教が「土着」の信仰のコインの裏と表の関係となって存在している点は大変興味深い。新しく流入したキリスト教的、あるいは「近代」的事物が、人々の想像力を掻き立て、在来の「災因論」を強化し、お互いが「共犯関係」ともいえる関係を形成しながら展開しているという事例はこの地に限らないはずである。

とはいえ、この事象が1980年代以降に隆盛した「妖術のモダニティ」論のように、構造に事象を吸収していくような理論とともに語られるべきであるとは評者も考えない。このような理

論ありきの議論は、筆者の描いた「蜘蛛の糸」の粘性を奪ってしまいかねない。おそらくこの場合足掛かりとなるのが、筆者が対話をもとに注意深く提示した、諸概念の動態分析だろう。この手法を（西）ナイル系諸民族の概念分析に応用することで、ナイル系民族が有する諸概念と、キリスト教神学や「近代」といった新しく流入した諸概念が前提とする時間論や宇宙論、身体論との共鳴関係について考察し、トランス・ローカルな理論を提示することもできるのではないだろうか。もちろん、これを達成するためには、更なる年月のみならず、共同研究も視野に入れる必要があるだろう。事象の個別性を探究すると同時に、地域を越えて共有される心性や論理、社会のメカニズムを読者に喚起させる本書は、人類学という一個の学問領域を超えて評価されるべき作品である。

(はしもと えり 立教大学)